

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2021-01-01

**特集 街路樹は日本の景観
を変える**

目次

P1

■巻頭

街路樹の種類と街の景観

／（写真・文）濱野 周泰

P2～3

■TDA NEWS 1

第6回日韓都市デザイン交流会：開催報告

／吉田 慎吾

■TDA NEWS 2

第2回webセミナー：開催報告

／金子 祐介

■ランドスケープ事情

お茶の水仲通り

／矢内 匠

P4～5

■特集：街路樹は日本の景観を変える
弘前公園に学ぶ、地方創成の街路樹

／福岡 徹

P6

■シリーズ：地域から

小布施町 その4

／西澤 広智

■景観ビジネス最前線

／大成ロテック(株)

■ホワイトボード



新百合ヶ丘の紅葉したモミジパフウ

街路樹の種類と街の景観

文明開化により生活様式とともに、「まち」の様子も大きく変化した。街道並木とは違い、まちの中に並木が現れた。明治維新前の安政6年（1859）、横浜の開港とともに関内の商家では店先の道路に装飾や目印、日除けなどのために松や柳を植えた。さらに慶応3年（1867）、馬車道通りに松や柳が並木状に植えられた。この並木が日本の街路樹の始まりと考えられており、馬車道通りには「近代街路樹発祥之地」の碑が建てられている。

明治6年（1873）、オーストリアのウィーン万国博覧会が開催され、その調査報告の中に道路並木の必要性和樹種の選択が記されている。明治8年、現在の馬場先門通り堀端にニセアカシア、明治11年にシンジュが植えられた。これらの樹木はウィーン万博から持ち帰った苗木といわれている。明治12年、津田仙は「農業雑誌」に街路樹種として、センダン、トウカエデ、ニセアカシア、ヤナギ、シンジュ、アオギリなどをあげている。

明治39年（1906）、東京市は白沢保美博士、福羽逸人博士に道路樹木改良案の作成を依頼し、翌年、イチヨウ、トウカエデ、トチノキ、アオギリ、エンジュ、イヌエンジュ、トネリコ、サクラ、プラタナス、ユリノキの10種を街路樹木として決定した。

現在の街路樹の基本は、明治39年の東京市の街路樹木の決定にあったと考えられる。この時の種類の中にハナミズキは入っていない。ハナミズキは、正式には大正4年に日本に来ている。しかし明治中頃、民間業者が輸入していたともいわれている。現在、ハナミズキの街路樹は大変多いが、街路環境に対する不適正、あるいは並木には形態が不適正だったのか、さらにはハナミズキの出現が時間的に間合わなかったのかなど興味深い。街路樹としての素養を十分に満たすものでなければ、美しい街並みを創り出すことはできない。

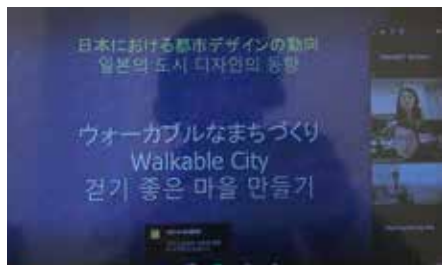
東京農業大学客員教授 濱野 周泰

TDA NEWS 1 第6回日韓都市デザイン交流会：開催報告

吉田 慎吾 色彩計画家
／TDA 副代表理事

“日韓都市デザイン交流会”は、第1回の会議が2015年に横浜で行われ、その後日本と韓国の都市を相互に視察して交流を深めてきた。第6回となる今回は日本側がソウルを訪れる予定であったが、新型コロナウイルスの影響でオンラインフォーラムとなった。会議は“より良い都市デザインフォーラム”会長のイ・ソクヒョウン氏とTDA代表理事の倉田直道氏の開催の辞から始まり、“パジュ市都市デザインの現行と課題”と題してパジュ市統括建築家のイ・キオク氏、“横浜市小金町プロジェクトと創造都市事業のこれまで”を元横浜市創造都市推進部長の秋元康幸氏、“東京・向島PROJECT 密集市街地の防災から地域価値向上へ”と題して、明治大学教授の山本俊也氏、そして最後に“ソウル都市再生における青年の役割と未来”と題して行政安全部課長のファン・ソクヨン氏から報告があった。その後、オンラインでパーティーも行われ、今後の会議の在り方を拡大する上でも有意義な一日であった。

詳細は次号でお伝えする予定である。



TDA NEWS 2 第2回webセミナー：開催報告

金子 祐介 城西国際大学環境社会学部助教
／TDA 正会員

景観デザイン支援機構・連続webセミナーの第2回目を2020年10月29日に開催しました。

第1回目として行なった上井草の『雑木の株立による景観づくり』(拙紙50号参照)の中で出てきた「適疎」というコロナ禍におけるまちづくりのキーワードを巡り、そのモデル地区と呼べる北海道東川町の東川スタイル課課長・菊地伸氏と東川町のまちづくりをハード面から支える北海道大学准教授・小篠隆生氏を講師にお呼びし、『「適疎」なまちづくりから生まれる東川スタイルの暮らしと景観〜北海道東川町の取り組み』と題したお話を伺いました。



開催報告：拡張・拡充ではない「まちづくり」の未来像について考える

まず、第一部では、菊地氏から東川町の一般的な紹介がなされました。

特に、＜疎＞という一般的にはマイナスのイメージと取られがちな環境を表す用語を、プラスに転じる方法として「適当に

疎>のある暮らし」というコンセプトを掲げまちづくりに取り組んできた東川町の状況や経緯についてご紹介いただくとともに、東川スタイル課を創設し取り組んできた景観行政の具体的な活動についてご紹介いただきました。

例えば、町長の松岡市郎氏が定義した「三つの道のないまちづくり」という考え方はその一つの事例です。一般的に「国道がない、鉄道がない、上水道がない」というまちは、近代都市の定義では「不便で生活ができるのか？」といった非難を受けてしまいますが、その対極として立ち現れてくるメリットを生かし、「無い」ことを評価の基準とした景観まちづくりへと政策を転じていったとのことでした。実際に、東川町では、上水道がなく、今でもおいしい地下水で暮らしているそうです。

また、東川町を代表する木彫を生かした看板制作や田園を中心とした農村景観の保全などまちの産業を生かした景観づくりを行っていくことも実践されています。

さらには、その景観を、住民や写真家に撮影してもらい記録として残してもらうプロジェクトとして「東川町国際写真フェスティバル」や「高校生国際交流写真フェスティバル」を開催し、まちの広報活動を行っている様子を御紹介いただきました。

他にも、景観づくりそのものではありませんが、結婚届けのデザインを特殊なものにしたり、子供用の椅子のプレゼントなど生活の色々なところでデザイン的な仕掛けも組み込んでいます。

ランドスケープ事情

お茶の水仲通り



お茶の水仲通りは千代田区神田駿河台の茗溪通りから道灌通りの間にある全長約370mの区間道路です。沿道や周辺には、明治大学、日本大学をはじめとした教育機関や医療機関が多く集まっており、“地域のシンボルとなる道路”を目指し、①人にやさしい、②地域個性の表現、③環境への貢献、④高い恒久性の4つのデザインコンセプトを軸に、設計段階から行政だけでなく地元地域、民間事業者が連携・協力して整備を行い、2012年に竣工しました。

整備は、歩道幅員拡幅(2.5m→3.0m)とそれに伴う電線類の地中化と車道の駐車スペースの撤去、歩道と車道の段差解消によるバリアフリー化が行われました。また、この通りの最も特筆すべき点として通り全体に配置された植栽帯にあります。その特徴として次の項目が挙げられます。

●株立ち樹木の採用

街路樹ではあまり見られない株立ち樹木が植樹されています。株立ち樹木を採用した利点として、一本立ちに比べ風につよく、緑量感が増し、涼しげな木漏れ日による道路空間の演出、成長に伴い枝張りが出やすい一本立ちに比べ、成長が遅く、管理上、強剪定による樹木ヘダメージや景観を損なうことがないなどが挙げられます。

●四季の変化、都心の生態系には配慮した植栽計画

お茶の水仲通りは、都心部の大規模な緑地帯の上野恩賜公園、皇居の中間地点に位置し、周辺にも神田川の流域緑地や三井住友海上駿河台ビルの屋上庭園などの緑地や庭園が点在しているため、周辺の緑地との繋がりを意識し、コゲラやメジロの鳥類や鳥類の生態系の

ただし、こうしたプロジェクトは、行政が全て運用していくトップダウン型のまちづくりの企画ではなく、まちの人々がいつの間にかまちづくりに巻き込まれ参加できるようなボトムアップ型のまちづくりの仕組みとして企てられていることがプレゼンテーションを通して伝わってきました。

また、第二部では、建築を中心に東川町をどのように魅力あるまちにしていいたかを、小篠氏が関わった活動を中心に御紹介いただきました。特に、新設した東川小学校+地域交流センターと旧小学校をリノベーションした東川複合交流施設『せんとびゅあ』を中心に据えたスクラップ＆ビルドではない「リノベーションによる回遊型まちづくり」の仕組みについてお話いただきました。

例えば、旭川と繋がっている「道道線沿いに並んでいる個々の商店をどのようにまとまりあるものとして回遊型プログラムの中に取り込めるのか？」ということについて、地域マネジメント課題として取り組んでいっていることが印象的でした。つまり、課題となっている商店群だけのこと

を考えるのではなく、他のまちづくりのプログラムとの関連性を考慮し、個人商店を公共施設とのネットワークに位置づけ、回遊性を高めるというものでした。

特に、東川町が掲げる「福祉」「教育」「子育て」というテーマに即し、「既存の小学校というの建物内での教育だけではなく、地域全体で子育てを行う」ということをコンセプトにまち全体をつなげていくというプログラムづくりに小学校がハブとなっていることをご説明いただきました。同様の発想で、点在する東川町の公共施設を複合的に利用するシステムづくりを検討されています。放課後や休日にこどもを教育していくシステムとして、既存の社会教育のプログラムと新たに整備した公園内の農地を利用した環境教育プログラムを連携させ、人々の活動の連鎖によって既存の都市構造をよりよく機能させる試みが検討されていました。

また、東川町に若者が根付いてもらうための活動として、自らのまちにプライドを持ってもらうための工夫が多く紹介されました。

例えば、ここには旭川家具を製作するための木工産業が根付いているので、そのノウハウを利用し、学校の家具自体を地産地消システムで製作し、こどもの頃から自分たちのまちの産業を知ってもらう機会を作っているとのことでした。こうしたものづくり活動は、家具だけではなく、学校の空間のイメージを創り出しているクラフトデザインにおいても同じです。さらに、食育の側面でもブランド米である「東川米」について親しみを持ってもらうための社会学連携プログラム「田んぼの学校」を行なっている旨を紹介いただきました。

以上が講演の概要となりますが、講演後に行われた拙法人運営委員とのパネルディスカッションでも、「行政職員の活動だけでなく、いい景観を創り出すためにも建築家やデザイナー、東川町の住民と連携を図れるような仕組みづくりを今後も継続的に行っていただきたい。」という趣旨の意見が多く出た。



TDA 正会員 矢内 匠



育みに貢献する樹種をしてエゴノキ、クロガネモチなど由来種を中心に選定されています。また、四季折々の景観の変化を感じられるようカスミザクラやイロハモミジといった樹種も選定されています。

●健全な樹木育成環境の整備

一般的な歩道で見られる樹木の根上りやそれに伴う歩道部の不陸が見られません。植樹帯周辺の舗装下の路床の一部に耐根シートと根系誘導耐圧基盤を使用することで樹木の根の生長を阻害することがなく、ブロック敷材の下に根が回り込むことを防いでいます。また、一般的な植樹桝に比べ、低木と高木を混植して植樹桝域を大きくとり、樹木の健全な育成を促しています。歩道側に伸びた樹根を保護するための植栽桝蓋と地面との間を15cm程度あけることで、地面の踏み固めを防ぎ、根へのダメージを少なくしている。

●シンボルとなる地域の協力による維持管理

竣工から10年近く経過しているが、その重要な構成要素の一つである街路樹は、一層枝葉を広げ、夏場には、街路に心地よい陰を落としています。舗装ブロックの欠損、不陸も見られず、シンボル軸としての景観が保たれています。先ほど述べた整備の特徴に加え、計画当初から変わらない行政、地元地域、民間事業者の協力によって、その景観が保たれています。

※原稿作成にあたり、設計・施工に携わった鹿島建設の佐藤氏と、現在の通りの管理をされている千代田区の道路公園課の樋口氏にご協力と資料提供を頂きこの場を借りてお礼を申し上げます。

弘前公園に学ぶ、地方創成の街路樹

福岡造園代表作庭者／
杜CLUB
福岡 徹

二年程前、能代市の福岡さんを訪ね取材させてもらった。街路樹への関わりは通学路の街路樹の剪定をボランティアで始めたことだと聞いた。

誰もが出来るボランティアではないけれど、当たり前の事でもあるけれど、人の住む環境は人の力で変わる。それを実践されている事に敬意をもつと同時に見事な街路樹がその事を雄弁に語っていた。今回、景観に寄与する街路樹剪定の技術と考え方をテーマに寄稿をお願いした。

◇常識を覆した弘前方式

積極的な剪定で桜の若返りを図る弘前公園（青森県弘前市）には、樹齢 100 年を越えるソメイヨシノが 300 本以上存在する。独自の管理方法は『弘前方式』と呼ばれ、「桜切るバカ」の常識や「ソメイヨシノ 60 年説」を覆したと言われている。公園の景観を日本一に高めたその技術は、樹木と丁寧に向き合い、長生きさせることに情熱を傾けてきたことの証でもある。

弘前市は白神山地の玄関口。園内には山地の自生種を植えたコーナーもあり、ブナが林立する落ち葉の中を、浅い流れがゆるやかに蛇行する。作意を消した自然な雰囲気は、従来の庭の感覚ではつくれない。作者が気になって調べてもらおうと、この空間を手掛けたのは桜管理を指揮する樹木医さんだった。ご本人のお話では、大学時代の専攻は野菜。庭に対する先入観が無いからこそ、真つすぐに白神の自然を見つめ、そのあり様を表現されたのだと感じた。

エキスパートには専門知識が必要だが、それは既成の知識の詰め込みではなく、自身の実体験の積み重ねだと思っている。純粋に、どうしたら良くなれるのかを考えて、目の前の樹木と真剣に向き合うこと。この大切さは公園でも庭でも街路樹でも同じなのに、なぜ街路樹はいつもブツ切りになってしまうのか。ブツ切りされた木には、樹木への慈しみも知恵も工夫も無い。地方創成のこの時代、ブツ切りを全国標準にするのではなく、地域に合ったものを地域が考えて、地域独自の発想や視点で緑の景観をつくりたい。先入観を捨て、常識を捨て、従来と違う視点で木と街を見つめれば、ブツ切りにならない未来もある。地域視点で考えた、地元の事例をいくつか紹介してみたい。



●白神山地の風情を感じさせる雑木林と流れ（青森県弘前公園）

◇身近な自然に習う街路樹のあり方

「道路の付属物」とされる街路樹は、車歩道の安全確保のために、『建築限界』と

いう制限空間に入ることを許されない。電線や民地への侵入も同様で、枝の伸長が支障をきたしてきた時などに、境界の手前でブツブツに切られた木をよく目にする。そして、切り詰めた枝に合わせて全体樹形を整えようとするために、すべての枝を短くし、四方対称の樹形に縮小される。そこに、「イチヨウは円錐形」や「プラタナスは卵型」という先入観が加わると、○や△の硬い並木が出来上がる。近年は『自然樹形』を謳う自治体が増えてきたが、それでもやはり、整形を理想としているような印象を受ける。

ここで、『自然樹形とはなにか』を考えてみたい。一般的には、野原で四方に枝を広げる整った姿がイメージされることが多く、そうした単木の連続を『美しい並木』とする傾向がある。ただ、『連続する』ということを見ると、野原の単木ではなく、『樹林』をイメージした街路樹があってもよい。「自然樹形」の意味を調べると、『樹木が環境に適応していく状態』と出てくる。森の中では同樹種同樹齢の木でも生えている場所で形も大きさも違うが、これが『樹木の環境適応』であり、この場合の『環境』とは樹木にとっての物理的な『障害物』のこと。人間世界の障害物を自然界に置き換えると、人や車は大きな岩、樹上の電線は自分よりも大きな木の枝張り、歩道に面した民地の建物は崖と言えるだろう。自然界の樹木は大岩や崖や大木などの障害物をゆるやかに避けながら光や空間に向かって伸びる形をしているが、このような不整形な状態は、街なかの『建築限界』などへの対応と同じことだ。障害物は光を遮るため、光の無い方向には樹木は枝を出さない。であれば、境界際で枝をブツ切りせずに、はじめからここには枝が生えていなかったと仮定して、幹元から剪定すればいい。途中で切れば切り口付近からすぐ芽が出て支障を起こすが、幹まで下げれば伸長に時間が掛かり、頻繁な剪定も回避できる。樹木は必要以上に切られると元の枝葉を取り戻そうと急激に伸びるが、剪定を加減すれば成長は穏やかになる。結果として、剪定コストの削減となり、経済的な管理に結びつく。

◇自然淘汰に習う剪定位置

自然界の樹木は、日照不足などで自ら枝を枯らす。その枯れが止まる位置を観察すれば、適切な剪定位置や角度がわかる。樹木を、野にあるような自然な姿に剪定する技術を『野透かし』と言うが、「透かし」

〈例1〉



- 光と空間のある方に枝を出し、崖側には枝を出さない片枝樹形の山の木（左/青森県奥入瀬渓谷）
- 境界際でブツ切りされた公園樹（真ん中）
- 越境対処として、境界側の枝を幹元から剪定し、片枝樹形とした公園の木（右）

〈例2〉



- 『片枝樹形』のトンネルを形成する秋田県五城目町のケヤキ並木（左）
- 『片枝樹形』は、支障の出ない枝を残すことにより、樹木の養分生成力を確保する（東京都江戸川区街路樹指針より）

〈例3〉



- 樹高を低く枝張りを広くした実採り目的のイチョウ（左/秋田県大湯村）
- 左のイチョウをヒントに、樹上の電線を大木の枝張りとなえ、電線下で枝を広げるようにしたイチョウの街路樹（右/能代市内/剪定：福岡）

〈例4〉



- 電線が密集する箇所を大枝で抜き、建限界に対処させつつ、樹冠は維持しながら全体的に透かしたイチョウの街路樹（左/能代市内/剪定：福岡）
- 左の木の初夏。枝張りを残したことで場の木陰を確保し、剪定量を加減したことで徒長が抑えられている。支障に対処し、支障のない所は伸ばしているため、樹形に出入りがある。（真ん中/黄枠は建築限界）
- 反対側の歩道からは樹形が整って見える。徒長が目立ち始める時期に、樹冠は維持されている（左）

〈例5〉



- 電線を避けて剪定された例

という剪定方法は、幹と枝、あるいは太枝と細枝の付け根で切る。この付け根を示すのが枝枯れの止まるラインで、この位置で切ると腐朽菌が入りにくく切り口が再生しやすい。樹木が自身で枝を落とす時は、時間を掛けて腐朽から身を守るための準備をしている。人間は前触れも無く突然樹木の枝を落とすから、樹木は腐朽に対する準備をする時間が持てない。その準備を手伝ってあげるためにも、腐朽が入りにくい箇所切ってあげることが肝要になる。弘前公園の桜の剪定もこの方法を用いているが、桜ばかりでなく他の落葉高木も、ブツ切りをすれば枝が腐って幹が空洞となり、強風がくれば幹折れや倒木を起こす。道路にある街路樹は「倒木＝事故」となるが、市民を巻き込まないためにも、樹木を衰弱させる切り方をしてはいけない。市民の安全と樹木の健康は同意。街路樹に関わる者は、このことを強く意に留めておかねばならない。2012年に、秋田県能代市内の公園でフィールドワークを開催し、関係行政に樹木の枝枯れを観察してもらった。そのうえで、弘前公園の桜剪定方法を実践して見せた。能代市では今、市管理樹木にこの方法を採用し、市内でブツ切りを見掛けることは少なくなっている。



- 自然の枝枯れのライン（左）で剪定すると（真ん中）、腐朽が入りにくく切り口が塞がってくる（右/剪定の1年後）

◇自然豊かな田舎街の取り組み

私の暮らす秋田県能代市では、2009年に市道の街路樹管理の方針が改まり、「自然樹形」への転換が図られてきた。この動きは国・県道の街路樹改善にも繋がり、やがて、公園や公共施設の緑にも波及していった。街路樹は、一度ブツ切りに舵を取れば負の循環に陥りやすい。そんな中で、能代は正の連鎖へと向かうことができたのは幸いだった。能代市と弘前市は、広大なブナの原生林を誇る白神山地を挟んだ両端に位置する。ブナは『樺』と書くように、「木では無い」とされてきたが、近年、その地球的な役割が認められて、世界自然遺産に登録されている。同様に、木では無い姿となっていた街の木も、今はやさしさを取り戻しつつある。自然が身近にある田舎だからこそ、街の緑も自然と繋がる姿でいてもらいたい。

「小布施町」その4

おもてなしの精神から生まれる新たな動き



地域型住宅



第2町並修景エリア

小布施町では、1989年花づくり研修として先進地であるヨーロッパへの研修事業をスタートさせ（1997年まで）花のまちづくりにも力を入れてきました。現在では、個人の庭に自由に入ることでできるオープンガーデンが町内で、123軒にも及びます。小布施の人々のおもてなしの精神が「ソトはミンナのもの。ウチはジブン達のもの」という環境整備の理念と相まって、回遊性のある魅力的なまちを形づくってきました。

その後、宮本忠長は、小布施町のまちづくりの第二ステージに向けて、小布施町の景観・まちづくりを学術的な視点で研究し、まちづくりに生かすことが必要と考え、2005年に東京理科大学の川向正人氏を町に紹介し、小布施町が役場内にまちづくり研究所を開設します。

同じ頃、市村良三町長の相談から、「小布施町地域型住宅」が始まります。その内容は「住いづくり相談等で、デザイン協力基準・住まいづくりマニュアルをもとに景観形成の協力を求め、全国的に統一デザインのメーカー住宅が増えてしまう『メーカー住宅を住民に建てるな』とは言えない。何とか出来ないか」というものでした。宮本は、住宅振興財団に働きかけ、住宅5軒を住宅メーカー5社それぞれが小布施の景観に則したモデル住宅を計画するとい

うプロジェクトを立ち上げ、実現寸前まで行きました。しかし、大手メーカー住宅を推奨するような行政の事業はおかしいという本質を理解しない反対に合い、地域工務店を含む景観配慮型住宅分譲地計画に代わり、メーカーの仕様を地域の歴史・風土から生まれる景観に合わせていく我国初の試みは、意味合いの違うものとなりました。

またこれも同じころ、「小布施町並修景計画」のエリアから北に100m程離れた中町に「第2町並修景計画」が始まりました。長い間町民から愛されてきた茅葺の民家「池田邸」をまちづくりに生かす方法を模索しました。寄付を受け、官（行政）がすべてを引き受けるのではなく、民間の力で施設を永続的に維持ができる（経済的にも）仕組みを考え、この池田邸周辺を核とする新たなまちづくりのエリアが生まれました。

ここでも、私的空間が、公的空間に生まれ変わり、回遊性のある空間となりました。小径も整備し「北斎館周辺町並修景計画」のエリアとの回遊性も生まれてきています。

1989年に始まった「住いづくり相談」も今も継続していますが、発足当時とは、相談内容が激変し、住民の景観意識の変化を肌で感じています。今後のまちづくりのビジョンの共有を如何に構築するかの正念場と思っています。

景観ビジネス最前線



島根県 津和野町

インジェクト工法 ～車道石張り舗装～

観光地や商店街の美装化に
景観性と耐久性を兼ね備えた
石張り舗装です

大成建設グループ
大成ロテック株式会社

For a Lively World

〒160-6112

東京都新宿区西新宿 8-17-1

住友不動産新宿グランドタワー

TEL：03-5925-9436

担当：秋山・捧（ささげ）

ホワイトボード

日本は江戸時代、偉大な庭園国家であり、世界中に驚きを与えたといわれています。しかし今、都市の構造がかわり、さらに災害や大規模な開発で、その上メンテナンスの技能の変化でその根幹が揺らいできている事をつくづく実感しています。その中に

あって街路樹のあり方は景観ばかりでなく温暖化の問題でも重要と考えています。そしてそのあり方で、日本の都市景観は大きく変わるはずで。私の仕事上での試行錯誤もいずれ、新編集長に頼みこの紙面でご報告をさせていただければ幸いです。